

人の活動=にぎわいの根源

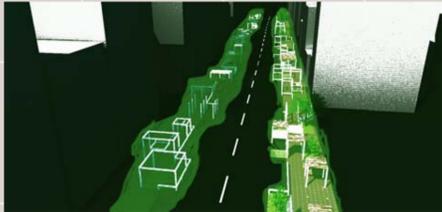


誰かが何かをしている。このミチにはたくさんの活動が落ちている。

大井町んたく祭りは毎年にぎやか。人の活動が溢れ出す。



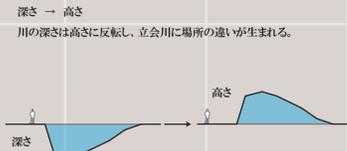
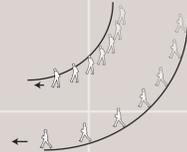
そこに在るモノ



建築としてそびえたつわけでもなく、ただそこに在る。もたらした。これからも在る。

立会道路を見つめなおす

立会川をなぞる
埋められてしまった立会川をひとつつくる。
川の流れ → ひとの流れ
はやさは歩くスピードであり、流れの緩急が現れる。



立面のグラデーション

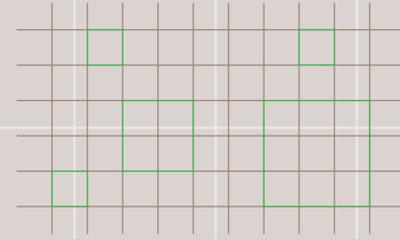
商業スケール

住宅地スケール



駅から住宅地へ、にぎわいのグラデーションが生まれる。それぞれの場所に適した、にぎわいの濃さがある。フレームのスケールがにぎわいの最大値を制御する。

グリッド計画



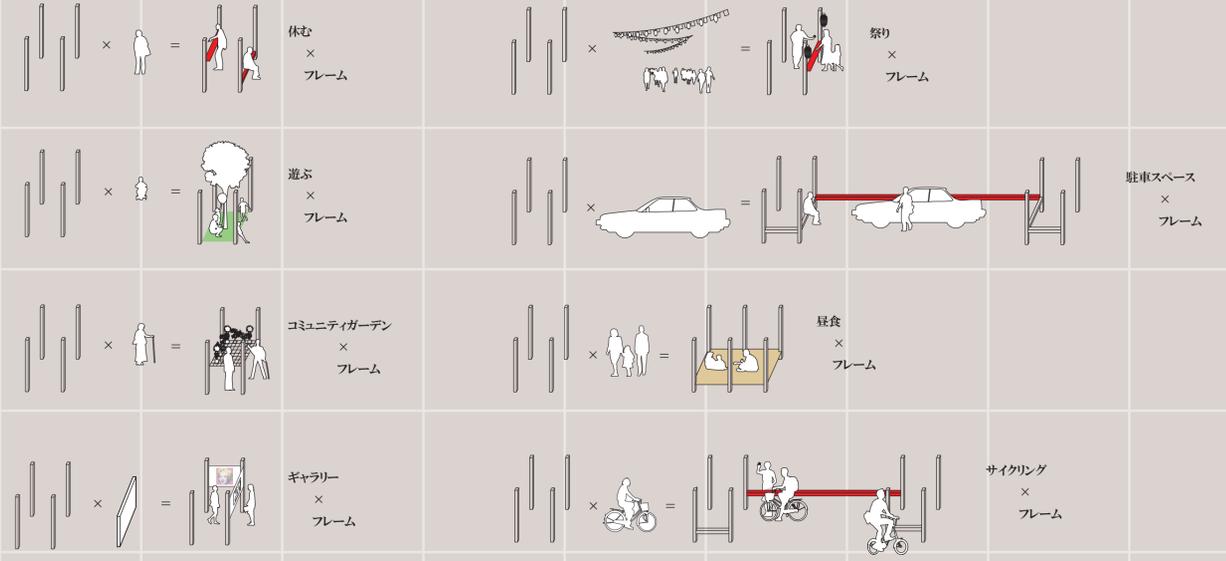
2m x 2mのグリッドを基準とし、交点に柱を配置する。
電話ボックスのような人ひとり分のスケールから、自動車や樹木のスケールに幅広く対応する。

今、在るモノの派生



今、在るモノがフレームになる。フレームが今、在るモノになる。
フレームがまちに溶け込む。

ダイアグラム

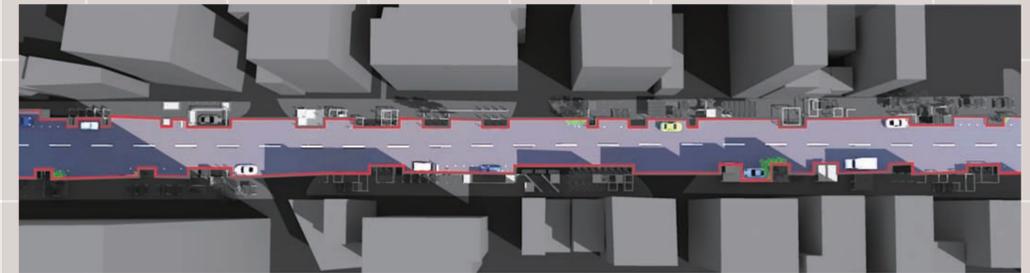


フレーム x 人 フレーム x 機能 フレーム x OOO = にぎわい

めぐ 廻るミチ ー大井町のうつろいー

大井町には独特の「人の多様性」がある。それが、大井町の特性であり、まちを形成する大きな要因になっている。しかし、にぎわいは駅前に集中し、少し離れると途端に静けさに包まれる。
にぎわいがすぐ途切れてしまうのは、人の活動が途切れているから。大井町に発生する人の活動は時と場合によって様々なカタチに変化する。このまちに機能が制限された空間は溶け込めない。
私たちは大井町のにぎわいを創出する際の軸として「人の活動=にぎわいの根源」であると定義し、通りの提案をしていく。
多種多様な人の活動を廻らせることで、大井町独特のにぎわいが生まれる。

ゆっくり走る



フレームが車道と歩道の境界を決める。シケインとしての役割を果たし、車のスピードは落ちる。

生活シーン



「歩きたくなるまちは、途中で足を止めてみたくなるものである。」



「歩行者にとって安全なまちは、運転手にとって快適なまちである。」



「用事などないのに、歩いてしまう。つい、ここを通ってしまう。」



「花に水をあげる日課がある。そこからコミュニティが生まれる。」



「情報が集まる。人が集まる。まちを知る入口がここにある。」



「人を待つ時間など惜しくない。歩道は長ければ長いほどいい。」

～人があつまる大井町駅前中央通りアイデアコンペ～

提案要旨説明書

■作品タイトル

廻るミチ 一大井町のうつろい

■提案要旨

大井町には独特の「人の多様性」がある。それが、大井町の特徴であり、まちを形成する大きな要因になっている。しかし、にぎわいは駅前に集中し、少し離れると途端に静けさに包まれる。

にぎわいがすぐ途切れてしまうのはなぜか。それは、人の活動が途切れているから。大井町に発生する人の活動は時と場合によって様々なカタチに変化する。このまちに機能が制限された空間は溶け込めない。

そこで、柱と梁で形成されたフレームを挿入する。2m×2m のグリッドを基準とし、交点に柱を配置する。そのフレームに活動が組み込まれることでその空間に意味が生まれ、色がつく。それが連続することで「にぎわい」となる。私たちは大井町のにぎわいを創出する際の軸として「人の活動＝にぎわいの根源」と定義し、通りの提案をしていく。

フレームの道での在り方は様々である。通常は、歩車分離を担うガードレールのような役割。人が介入することで東屋のような場所になり、人が介入しなければ樹木とさほど変わらない存在。大井どんたく祭りの時には屋台が組み込まれ、やぐらにもなり、にぎわいに溶け込む。災害時には仮設テントの骨組みとなり、地域の共通認識のもとで、集まる場所になる。

駅前の商業地域から住宅街へと続くフレームの連続はにぎわいのグラデーションを生みにぎわいのスケールが変化していく。

フレームが多種多様な人の活動を廻らせることで大井町独特のにぎわいが生まれる。

※なぜこのような提案としたのかという理由や、特に工夫した点、アピールしたい点などを自由に記載してください。